

ダニンゴーンの野菜市場

山形洋一

ヤンゴン環状鉄道の南西の角に、ダニンゴーン駅がある。北のピー方面との分岐点にあたり、複々線の重要な駅だ。駅舎の前にある1番線は環状内回り。2番線は環状外回り、同じホーム反対側の3番線は北から来る列車用、そして4番線は北のローガー(Hlauga)行きである。ヤンゴンから外回りで一周するつもりなら、この駅の4番線ではなく、2番線に入ったことを確認しなくてはならない。



だが間違ってもたかが知れたもので、北行き鈍行はこのあと、工業団地、シュエピター、ローガーと3駅目で、また折り返す。ちょっと北へ足を延ばしてみるのも、また一興ではないか。

都市向け野菜の集積地として、駅前に公設市場が置かれているが、水はけが悪く、饅えた漬物の匂いで充満している。雨季には足元に黒い水たまりができ、長靴の用意が望ましい。売り子はプラットフォームにもあふれかえり、足の踏み場に困るほどだ。

図 1 野菜を列車に積み込む男達

「ダニン」は大型の豆で、「臭豆」と漢訳される。1928-9年測量の地図では、ここがミンガラドン駅と呼ばれ、現ミンガラドン駅はカントンメント(兵営)駅と呼ばれていた。ダニンゴーン駅から東に今のミンガラドン駅の方に延びるカィエーピン道路も、かつ

ては Mingalardon Link Road と呼ばれていた。兵營の移転とともに、「ミンガラードン」の名前まで東遷したのだろうか。



図 2 ダニンゴーン発列車内。おばさんたちは野菜を縛りなおし、仮眠をとる。

駅前市場の取引は午前集中し、正午を回ると、買いつけ客でごったがえす。おばさんたちがデッキに殺到し、窓から押し込まれた大荷物を受け取って、床に並べる。こちらは乗り込むのに精いっぱい、とても座席には座れない。おばさんたちは列車の中でも手を休めず、野菜の束をほどいて無駄な葉をむしり、適当な大きさに束ねなおしたりしている。そのうち、腰の後ろに赤と緑の信号旗を挟んだ車掌が回ってきて、荷物の持ち主から 100 チャップつ徴収しはじめる。ほとんど言葉を交わさず、切符を切る様子もないので、役得として個人のポケットに入るのだろう。

駅に近づくと、列車が止まりきらぬうちから、一個、また一個と、大荷物が窓からホームや反対側の線路に投げおろされる。降り立ったおばさんは、客待ちのサイカー運転手にそれを担がせると、あとから悠々と歩いてゆく。

ああ、遅しきかな、ミャンマーのおっかさん。